

Title	京大上海センターニュースレター 第307号
Author(s)	
Citation	京大上海センターニュースレター (2010), 307
Issue Date	2010-03-08
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/106310">http://hdl.handle.net/2433/106310</a>
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

### 目次

- 道教と和諧社会
- 読後雑感 : 2010年 第2回
- 【中国経済最新統計】(試行版)

### 道教と和諧社会

02. MAR. 10

中小企業家同友会上海倶楽部代表  
上海センター外部研究員(協力会理事) 小島正憲

中国で今、道教が静かなブームになりつつあるという。かつて共産主義の教科書には、宗教はアヘンであると書いてあった。また文化大革命の時代には、紅衛兵が仏教・道教・儒教などの寺院や建物、仏像、ご神体などを破壊し尽くした。

あれから40年ほどが過ぎ、今では中国社会の中に宗教も同居するようになった。儒教は孔子学院という形をとり、中国政府の後押しで世界各国にその影響力を広げており、仏教寺院も中国各地でずいぶん復興している。道教は日本人にはなじみの薄い宗教であるが、近年その力を盛り返しつつある。中国政府も和諧社会と折り合いのつく道教が、社会安定のために有用だと考えているようである。

《上海浦東にある聖堂廟:崇福道院内の「建設和諧社会」の横断幕》



#### 1. 長春観と武当山

昨年の11月15日、湖北省の武漢の道観(仏教における寺院):長春観で、呉誠真大師(52歳の女性)の方丈就任式が行われた。方丈とは道教大寺院最高指導者の呼称で、女性がその地位に着くのは、1800年余の道教の歴史上初めてのことであるという。男性でも方丈になるには、特別な修業を続け、戒律を守り、徳が高くなければならないそうである。私はこの情報を聞いて、ぜひこの女性方丈に会ってみたいと思った。幸い、呉大師が湖北省政治協商会議の常務委員となっておられ、私の合弁会社の総経理も政治協商会議に名を連ねていたので、そのついでで会わせてもらえることになった。

長春観は武漢の中心部にあり、周囲を高層マンションなどが取り巻いていた。山門には小さな三つの入り口があり、一般大衆はこれをくぐって入り、自らを三界(衆生の暮らす世界)と遮断するという。道観内はかなり広く、多くの建物があり、老子像などもあった。その他、数多くの私の知らない神様が祀られていた。

この日は春節前で、一年のうちで一番忙しいときであるにもかかわらず、呉大師は私を自室に招き入れ、ゆっくりと対応してくださった。私は、呉大師について、「修業を積んだ偉い女性方丈だから、きっと華奢で雲の上にでも浮かぶことができる仙人のような人だろう」と想像していた。ところがそれとはまったく逆の大柄な恰幅のよい方だった。声も大きく、ときおり大声で笑われ、その仕草などを見ていると、近所のおばさんと話しているような気がした。私はこれが道教の良さなのかもしれないと思った。呉大師はまず私に、「なにが聞きたいのですか」と明るく問いかけられた。私が「道教とはなにを教えているのですか」と、素人丸出しの質問をすると、嫌な顔もせずそれに丁寧な答えてくださった。それは人間の思想や健康維持に関する話が主だった。話の最中に、呉大師の携帯に5分おきぐ



らいに電話がかかってきていた。私はそれを見て、現代の方丈は、文明の利器を使い、空中を飛び回っておられるのだと思った。

30分ほど話をうかがって私が席を外そうとすると、呉大師は私を食事会に誘ってくださった。呉大師の弟子は1万人を超えるそうだが、今日は弟子の一部と記者、政府関係者など、100人以上を招待しているという。私はその雰囲気を経験してみたかったので、お言葉に甘えて参席させてもらった。その宴会では呉大師の隣に私の席が用意されており、驚いた。出された食事は、野菜や穀類のみで素菜料理と名付けてあった。仏教で言うところの精進料理と同じようだった。野菜や穀類で上手に魚や豚肉の形が作られており、味もそれなりに美味しいものだった。もちろん酒類はいっさいなく、宴会では薬草茶での乾杯が続いた。下戸の私はたいへん助かった。宴会は日本の忘年会のようなもので、にぎやかだった。

その日の夜、気功の達人がちょうど武漢へ来ているというので、会いに行った。彼は仏教の少林寺と並び称される道教の修験道場である武当山の道長であった。事前に、「道長は気功の達人で川面を走って渡ることができ、初対面の人でもすぐに内心を読み取ってしまう読心術を心得ている」と聞いていたので、おそろおそろ会ってみた。ところが道長もこれまた決して仙人のような人ではなく、ひげを除くと近所のおじさんのような人であった。道長の話では、武当山は明の永楽帝のとき開山され、その建造には述べ30万人が動員されたという。そこでは現在、400人の道士が太極拳などを始め、仙人になる修業しているという。道長と、とりとめもない雑談をして、別れ際に道長の名刺をいただきたいと申し出たら、「名前は李光福というが名刺はない」とやんわり断られた。



《左は李道長、右は合弁会社の総経理》

翌日、私は朝早く起きて武当山に向かった。武漢から高速道路を4時間ほど西北に向かって早朝の霧の中を走った。武当山は一大観光地であった。麓の駐車場には登山専用のバスが約50台、ずらりと並んでいた。夏の観光シーズンにはたいへんな込み合いになるという。ちょうど私が訪れたときは、冬季であり観光客もまばらだった。10人ほどの観光客がいっしょにバスに乗り込み、頂上を目指した。麓でも風が吹いていて寒かったので、山頂はもっと寒いだろうと思い、案内係に聞いてみると、「1度から18度」と素っ気ない返事だった。1度と18度ではまったく違うので、再度聞きなおしたが同じ返答だった。私は何かの間違いだろうと思って、それ以上は聞かなかった。30分ほどバスで登っていくうちに、だんだんと天気が悪くなり、とうとう雨が降ってきた。山頂には、バスの終点から今度はケーブルカーで1.7kmほど昇っていかなければならないという。その乗り口付近はすでに濃い霧で覆われ、数メートル先が見えなかった。私はこの霧ではどうせ頂上に行ってもなにも見えないだろうと思い、止めようかと思った。しかし道士たちの修業の様子も一度見たかったので、景色が見えなくてもよいと思い直し、そのままケーブルカーに乗り込んだ。



ケーブルカーはエレベーターのように垂直にぐんぐん昇っていった。霧も濃くなり、窓の外は真っ白で何も見えなくなった。そして窓の隙間から寒気が入り込んで、身も心も縮みあがるほど寒くなってきた。ところがものの5分ほど昇っていくと、うっすらと樹木が見えてきた。そしてさらにそれらの木々の枝がぴかぴかと光ってきた。私は瞬間的に「これは霧氷だ」と思った。その美しさに見とれているうちに、あたり一面の霧がさっと晴れ、太陽の光が燦燦と輝いてきた。ケーブルカーが雲海の上に出たのである。周囲の景色はまさに下界とは別世界であった。桂林の山々が雲海の上に突き出ているような情景だった。その絶景は言葉では表せないし、私の安物のデジカメではそれを撮ることも不可能であった。ケーブルカーの終点に降り立つと、不思議なことに暖かかった。コートが不要なほどだった。そこでやっと私は「1度から18度」の意味がわかった。まさに山頂は仙人の住む世界であった。私は「明の永楽帝はどのようにしてこんな山を探し当てたのだろうか」と思った。

そこから狭い階段をかなり上っていったところに道観があったが、道士がのんびり洗濯などをしているだけだった。すでに午後だったので、午前中の修業時間は過ぎてしまっているということで、残念ながら太極拳の練習風景は見られなかった。ただし道士の最初の修業の「天秤棒での水桶担ぎ」の道具が置いてあったので、それを担がせてもらって記念撮影をした。道士たちはこれに水を満杯にして走り、一滴もこぼさないという。とても私にはできない芸当であった。

さらに山頂を目指して階段を上っていくと、頂上には金色に輝く道観があった。さすがに紅衛兵もここまで上ってきて破壊することはなかったので、明の永楽帝が建造した道観が健在であった。それはすべて銅で作られており、それが陽光に当たり燦然と輝いて、金色に見えるのである。まさに神秘的な美しさであった。さらに周辺の建物は強風に耐えられるように、すべて石造りで頑丈に作ってあった。この山頂に、これらの歴史的建造物が残されていることに、私は感動した。

途中の道観では、道士たちが本を読んだり、お経を唱えたりしていた。どんな





お経かと思って、それをぱらぱらとめくってみて驚いた。そこには「臨兵闘者皆陣列在前」と書いてあったからである。私は若い頃に、この呪文を恩師から日本の山岳修験者のもので、「リーダーはいつも陣頭指揮に立たねばならない」という意味だと教えてもらったことがある。以来、私は自分の心の中に怯む気持ちが湧いてきたとき、これを心の中で唱えることにしていた。ところが父親の葬儀のとき、たまたま宗派の違う僧侶がやってきて、お経の最後で、この呪文を大声で唱えた。私はそのとき、これは山伏の呪文なのに、どうしてお坊さんが唱えるのかと思って不思議であったが、忙しさにかまけてそれを深くは追究しなかった。私は武当山の頂上でのこの呪文との出会いに、なにか運命的なものを感じた。そこで日本に帰って調べてみると、この呪文はもともと道教のもので、抱朴子の中の一説であることがわかった。それが日本の山岳修験道や仏教に伝わったものらしい。正確には若干、唱え方が違うようだが、道教が原典であることには間違いがないようである。

## 2. 中国人にとって道教とは何か

さて、そもそも道教とはどんな宗教なのだろうか。以下、「中国人の宗教・道教とは何か」(松本浩一著 PHP 新書)に学びながら考えてみる。

松本氏は、まず簡単に、「仙人とは山の頂上に住む人で、下界である世の中すべてを見渡すことができる超人であり、俗人とは谷の底に住む人で、目先のことしかわからない凡人である。道教は俗人を仙人に昇華させる宗教である」と説く。私はこの説明は言い得て妙だと思った。

次に松本氏は、「道教は、仏教やキリスト教のように誰か創始者がいて、その人が唱えた教えによって経典が作成され、その教えを人々に広めるために教団が形成される、といった過程を経て形成されていったのではない。日本の神道などと同じように、社会的生活の中から自然に形成されてきた、いわゆる自然宗教という性格を持っている」と書き、その教えは、①中国の古代宗教、②神仙思考、③黄老の学、④陰陽五行思想などに淵源を持つと分析している。

一方、儒教は「支配階級のためのものであって、庶民とは無縁のものであった」と言い切り、「道教はもともと太平道と五斗米道という、混乱の世に信仰と呪術を核に結成された宗教結社を、その源流としている」と書いている。たしかに儒教とは違い、このような宗教結社は、特に王朝末期に世の中が乱れてくると反乱を引き起こし、それが王朝交代のきっかけとなることもあった。明王朝が成立する際の白蓮教の反乱などもこの例である。

当然のことながら、歴代王朝はこのような宗教結社を体制側に取り込み、その維持に利用することに努力した。唐の玄宗皇帝は、道教・儒教・仏教の順で守護し、それらを体制の延命に役立たせようとした。明の永楽帝も、道教を保護し、武当山に本山を築造し、経典の集大成ともいう「道蔵」の編纂を行い、それによって自らの地位を権威付けようとした。

## 3. 私の中の老荘思想

道教はまた老荘の思想だと言われている。私は老子と荘子について次のように理解している。徳間書店の「中国の思想 第6巻 老子・列子」によれば、老子または老子道徳教と呼ばれる書物は、比較的長期の年月にわたって、幾人かの人々の手を経て、改訂を加えられたものであるという。またその思想の根幹は下記のようなものであるという。

「無為―それは、道を認識し、道の働きと一体化することである。換言するなら、法則を把握して、その法則をとことんまで利用することである。人はだれしも、“美”はつねに美であると考え。美は同時に“醜”でもあることを知らない。だれしも“善”はつねに善であると考え。善は同時に“悪”でもあることを知らない。“有”と“無”、“難”と“易”、“長”と“短”、“高”と“低”、“音”と“声”、“前”と“後”、これらの対立する概念は、あくまで相対的な区別にすぎない。相互に関連し合い、限定し合い、転化し合って、ひとつの統一をなしている」

この老子の思想、つまり存在するものすべてを対立の関係においてとらえる考えは、春秋時代以前、すでに陰陽二気の説として生まれているが、老子はこれを一歩進めて、対立物の相互転化の法則を発見したのである。私はこの老子の思想から学び、自らの心の中に2重人格説を構築している。

荘子は、戦国中期(西暦前4世紀)の思想家: 荘周の著作とされる書である。かれは老子とともに、“老荘”と称せられ、儒家、墨家と鼎立する道家の中心的思想家とされている。荘子については、その膨大な著作をすべて読み込んだわけではないが、なぜかその茫洋とした思想に、私は大きな魅力を感じる。ことに「夢に胡蝶となる」という一説は、私の心を捉えて離さない。

「いつだったか、荘周つまりこのわたしは、夢で胡蝶となった。ひらひらと舞う胡蝶だった。心ゆくばかり空に遊んで、もはや荘周であることも忘れ果てていた。ところがふと目覚めてみれば、まぎれもなく人間荘周である。それにしても、荘周が夢で胡蝶になったのであろうか。それとも、胡蝶が夢で荘周となったのであろうか」

上記、「徳間書店 中国の思想 第12巻 荘子」より。

## 4. 上海の道観

私は上海に帰って、市内の道観を調べてみた。すると驚くことに、上海だけでも46か所の道観があることがわかった。ちなみに仏教寺院は76か所、キリスト教会は7か所、イスラム教のモスクは6か所、関帝廟は8か所、孔子廟は1か所。代表的な道観は下記の4か所であった。そこで私はそれらの道観に行き、中国の一般大衆がなにを求めてそれら

に参詣しているのかをしてみることにした。

・白雲觀 黄浦区西林後路 ・城隍廟 豫園の隣 ・聖堂廟 浦東新区三林灵岩南路 ・欽賜仰殿 浦東新区源深路

最初に行った白雲觀には、平日にもかかわらずたくさんの参拝客がいた。彼らの行動をじっくり見てみたが、その参拝方法に特別のしきたりはないようだった。多くの人が觀内の販売店で大きな線香のようなものを買ひ、それに火をつけ、うやうやしくかかげ、神殿内のご神体に向かってなんども頭をさげ、大きな香炉の中に立てていた。周辺はその煙で充満していた。神殿に入る前の小部屋で、大勢の人が赤い紙袋に紙銭をいっぱい詰め込んでいた。小部屋の奥の方で、その紙袋と紙銭が100～500円で販売されていた。神殿内には中央に主神が3体、その脇に多くの神様が祀られており、その前に先ほどの赤い紙袋がたくさん積まれていた。その赤い紙袋に書かれている文字は、病氣平癒、家内安全、商売繁盛などであった。とにかく大勢の人が主神の前で頭をなんどもさげていた。その中の数人に、拝んでいる主神の名前を聞いてみたが、誰もはっきりと知らなかった。主神が誰であろうとそんなことは関係がないという感じであった。



次に城隍廟に行ってみた。この道觀は上海の有名な観光地である豫園の隣にあった。私は豫園にはなんども行ったことがあったが、すぐ隣にこのような道觀があることすら知らなかった。なにやら気恥ずかしかったが、中に入ってみると立派な道觀であった。壁に掲示してあったこの道觀の沿革の中には、文革時代に破壊され、1994年に再建されたとはっきり書いてあった。参拝方法は白雲觀と変わらなかった。ただし主殿に行くまでの側道に、干支ごとに多くの神様が祀っており、さらにその神様の下に生まれ年が書き込まれていた。私の生まれ年を探していくと、あまり聞いたことがない神様に出会った。これが私の守護神なのだろうと思って、近くにいた道士にその名前を聞いてみたがよくわからなかった。デジカメで写してきた。参拝客も自分の守護神などに、あまり興味がないようで、そこに立ち止まってお祈りをしているような様子はなかった。

余談だがミャンマーでは自分の生まれた曜日で自分の守護神が決まっており、パゴダの周りをそれらの神様が取り巻いており、敬虔な仏教徒のミャンマー人たちが自分の守護神の前で、大勢お祈りを捧げている。その守護神とは動物であり、鳳凰や象、獅子などがあり、なぜかその中に“もぐら”がいる。私の守護神はその“もぐら”であったので、あまり気持ちが乗らず、結局守護神にはお祈りをしないで帰った覚えがある。

聖堂廟も大きな道觀であった。ここでは觀内で病氣平癒の祈願をしていた。道士の一人が長剣を振り回し、口から水を噴出して殿内を歩き回り、他の道士たちが一人の中年男性を前にし、木魚を叩いてお経を読んでいた。聞いたところでは、仏教のお経のようにも聞こえた。この主殿は三清殿で、たしかに元始天尊・靈宝天尊・道德天尊の三神が祀られていた。さらにその主殿に至る側殿には、多くの神が祀られていた。私にはその名前がまったくわからなかった。また多くの参拝客もだれも深くそのことを詮索していないようであった。とにかく病氣平癒・家内安全・商売繁盛を祈るばかりであった。よく見てみるとまだ合格祈願や交通安全は少ないようであった。



考えてみれば日本でも、自分が祈る対象の神様や仏様の詮索をあまりしない。これまた余談だが、私の岐阜の自宅の近くに“御首”という名前の神社と、軍神として有名な南宮大社がある。この二つの神社の神様は古くから仲が良くない。なぜならその昔、平将門が関東の地で討たれて首だけが京都に運ばれたという。将門の首は郷里恋しさのあまり、ある日、空を飛んで関東の地を目指した。ところが首が大垣の近くまできたとき、南宮神社の弓矢の名人といわれた宮司がその首を射落とした。その首の落ちた場所に、地元の人が神社を作り、平将門の御霊を祀り、御首神社となったのである。だからこの二つの神社の神様はいまだに喧嘩をしていると、私は判断している。ところが最近の若い人たちはこのいわれを全く知らず、二つの神社のはしごをして両方に願を掛けている。これでは絶対に神様は願いをかなえてくれるはずがないと、私はいつも思っているのだが、いかがなものか。

上海の4か所の道觀では、ともに占いやおみくじの類は売っていなかった。しかしこの道觀でも干支ごとに今年の運勢を占った大きな貼紙がしてあった。それらを見比べてみたがほとんど同じで、私の猪年は運気が最高でなにごとにも絶好調と書いてあった。ついでに妻の戌年のものを見てみたが、これは私と全く反対で衰運であった。ちなみに日本の高島易断の運勢占いでは、今年の私は運気低迷で、妻は運気上昇との卦が出ていた。私は道觀内の運勢一覧表を見て、同じく陰陽5行説に基づく易に起源を持つ占いでも、こんなに違うものかと思った。

どの道觀でも私がよく知らない神様がいっぱい祀ってあった。また道教と関羽様とは直接関係ないと思うのだが、関帝聖君として、側道に祀ってあるところが多かった。聞くところによれば台湾の道觀は、儒教・道教・仏教の神仏、民間で祀られている地方神など、あらゆる神仏のオンパレードといった様相を呈しているという。参拝者の方も、神様の前で仏教のお経を唱えている人も少なくないという。

いずれにせよ、人民大衆にとってみれば、自分が幸福になればどんな神様でもよいわけであり、中国政府にとって



みれば、民心安定と和諧社会の建設のために道教が役に立てばよいのであろう。

以上

\*\*\*\*\*

## 読後雑感：2010年 第2回

05. MAR. 10

中小企業家同友会上海倶楽部代表

上海センター外部研究員(協力会理事) 小島正憲

1. 「ポスト<改革開放>の中国」
2. 「7. 5 ウィグル虐殺の真実」
3. 「不思議な経済大国 中国」
4. 「中国ひとり勝ちと日本ひとり負けはなぜ起きたか」

### 1. 「ポスト<改革開放>の中国」 丸川哲史著 作品社刊 2010年1月30日発行

副題：「新たな段階に突入した中国社会・経済」

丸川氏が提起する「30年周期の中国転換説」は、面白い。この独特の発想は、丸川氏が純粹の中国经济学者ではなく、台湾地域研究者であることから生み出されたのかもしれない。ただしこの本は、文体が簡潔明瞭ではないし、内容を理解するために、同じ箇所を繰り返し読まなければならない部分が多い。その意味では一般読者向けではない。次作では、ぜひ読みやすい文章を書いていただけると助かるし、たくさん売れるのではないと思う。

丸川氏は、中国の現代史を30年周期で変化していると下記のように分析し、「現代中国におけるこの3つの30年周期がそれぞれ違った近代性を保有しつつ重層的に蓄積されていること—それが現代中国を理解する際の手掛かりなのである」(P. 10)、「総じて、この3つの30年周期は、それぞれ前の周期の価値観を否定、あるいは克服する動きとして出てきている」(P. 13)と主張している。

- |           |             |            |                          |
|-----------|-------------|------------|--------------------------|
| ①1919～48年 | 5・4運動から中国建国 | 「革命戦争期」    | 毛沢東が主導。土地革命。軍閥支配の終焉。     |
| ②1949～78年 | 建国から改革開放    | 「革命政治期」    | 毛沢東が主導。朝鮮戦争、中ソ対立、鎖国化、文革。 |
| ③1979～09年 | 改革開放から現在    | 「改革開放期」    | 鄧小平が主導。経済開放、天安門事件、北京5輪。  |
| ④2010～49年 | 改革開放の再始動    | 「ポスト改革開放期」 | ？                        |

丸川氏は①の時期において、毛沢東が主導権を取ったということは、中国人民によって「土地改革を志向する革命政府の方がうまく近代建設ができるし、さらに強力に国民国家形成ができるだろうという判断が下された」結果だと言い切る。②の時期を、「極端に閉じた体制を強いられ続け、…どこからも支援を受けられず、すべての社会資本を自己調達しなければならなかったし、そうしなければ安心もできなかった」と分析し、③の時期への移行を、「もう革命政治は続けられないし、対外戦争だけに備える体制はもう不可能である、中国は国際分業体制の中に入っていかなければならない—このような判断であった」と分析している。

丸川氏は天安門事件についても独特の見解を示しているので、長くなるが下記に引用しておく。  
「1980年代半ばから、“改革開放”は都市改革を目指すようになっていた。端的に、この失敗が天安門事件に繋がるのである。農村に関しては、土地をとにかく分配してしまえば良かったわけだが、これを都市に適用することができなかった。そして、都市の公的資源、たとえば工場の土地や施設を労働者一人一人に分配することができなかった、あるいはしなかった。そして、都市の公的資源を国有化からはずし民営化する際に、共産党幹部によって占有されるという現象が出てきた。それからもう一つ、国有経済システムからの離脱に際して、経済混乱が起きていた。たとえば国营企業で作られた製品の値段と市場ベースで作られた製品の値段が2重になる、また給料体系が2重体系になる。そこで都市生活が極度に混乱し、不条理な制度改革によって損をしているのではないかという不満が一举に昂進するところとなった。こういった経済混乱が、実は天安門事件の主要な原因であった」(P. 16)。

「1998年の天安門事件が遺した最大の矛盾とは、この天安門運動を弾圧したことにより、都市改革の失敗、もつと言えば“改革開放”の失敗がうやむやにされたということに尽きる」。

「総じて、天安門事件によって明らかになったことは、思想としての“改革開放”がそこで死滅したということである。そして資本のグローバルな自己運動としての“改革開放”が、この数年後に中国全土を席卷することになる。1992年の鄧小平による南巡講話がその合図となった。天安門事件によって生じた外国投資の冷え込みなど、経済包囲網を打ち破るためにも、経済システムとしての“改革開放”にもう一度エンジンをかけなければならず…、このときから中国が再び劇的に“改革開放”の軌道を走り始めるのである」

「そして一切の社会的エネルギーを経済建設だけに流し込んでいく、経済挙国一致体制が成立するのである」

鄧小平の南巡講和の時を同じくして、この時期に上海では朱鎔基の号令のもとに、浦東開発が進んだ。はらだおさむ氏は、「“第二次天安門事件”は、中国ではいまでも禁句である。もちろん今年の6月4日にもその記念式典などはなく、逆に天安門広場は立ち入り禁止の厳戒態勢がとられていた。わたしは中国ビジネスに半世紀、“革命の中国”のときも“改革開放”のいまでも、ともに歩んできたが、この“6・4”がなかったら中国の“本格的な改革開放”はもっと遅れていたであろうと見ている。この事件があったから、西側諸国は中国への経済制裁を行い、中国は“改革開放は不変

である”ことの“証(あかし)”として、翌 90 年 4 月の“浦東開発宣言”に踏み切ったのであった」と語っている。このはらだ氏の歴史の証人としての言は、丸川氏の説を反面から補強するものと、私は考える。

丸川氏は、今の中国を理解するためのキーワードは、「主権の防衛」・「経済建設」・「社会的平等」だと語っている。その上で「この3つの問題群一お互いに矛盾し絡み合う問題を地道に解決していく、これが現代中国のあり方であり、今後の中国の動向を探る中心軸である」と書いている。

丸川氏は第1部で、2008～09年の中国の変化を組上に載せているが、残念ながらその見方は皮相である。ことに新労働契約法の施行について一言も触れておらず、また金融危機に際しての中国政府の対応の敏速さについて、「実に議論の場としての議事を主要な政策決定の機関とする西側政府との違い」を印象づけられたとしているなど、中国の変化の実態を掴んでいないことを露呈している。これは文献主義者である丸川氏の限界であろう。それでも、09年から始まる30年が、「改革開放」の30年の間に曖昧にされていた“社会主義”や“革命”が再び問われることになるかもしれない。“改革開放”というスローガンは、とくに“文革”に対する徹底的な否定を前提にしていたのだから」と予想し、「米国を中心とした帝國的グローバリゼーションが行き詰まりを見せる中、もう一度そういった議論が起こるべきだろう」と書いている。

さらに天安門事件に関連して丸川氏は、中国政府が持ったのは、「この期間、資本の流れとして、西側諸国からの投資が冷え込んでいく封鎖状況が生まれたことへの危機感である。しかし西側からの封鎖状況は“人権”というコンセプトを楯にして西側が中国を包囲したという感覚」であったと書いている。私はこのくだりを読んで、あらためて新労働契約法施行の意味がはっきりと理解できた。つまり中国政府にはこのときの衝撃がトラウマになって残っており、天安門事件の当事者たちは北京5輪開催に際して、世界各国からの人権問題に関する批判を事前に避けておこうとして、闇雲に新労働契約法の施行に踏み切ったのである。いわばそれは「民主化圧殺コンプレックス」とでも呼べるものである。しかしそれが逆作用となり、多くの外資の撤退を呼び起こすことになるろうとは、中国政府は全く想像していなかったであろう。

中国の一人っ子政策について丸川氏は、「19世紀から20世紀にかけて、人口爆発は西洋社会と日本において、常に対外戦争、植民地侵略戦争の原因となってきたものである。中国脅威論が大きく西側において問題にされている中で、しかし中国の30年前からの対応は、その危機を減らすための断続的な努力にあった、という解釈も可能なはずである」と、新解釈を提起している。その上で、今後の中国社会に一人っ子政策のツケが大きくなるのしかかってくると予測している。つまり改革開放以前の世代を養うのは改革開放以降の世代であり、一人っ子世代である。ここに大きな世代間格差が生まれてくるし、改革開放以降の世代には十分な老後が約束されていないので、福祉体系の整備がますます重要になってくると説いている。丸川氏はここで年金体制の整備を想定しているのであろうが、私は中国政府に先進資本主義国とはまったく違う年金システムを開発してもらいたいと思っている。日本のような国であっても、年金は崩壊寸前なのである。ましてや中国では、十年を待たずしてそのシステムが行き詰まると思うからである。

## 2. 「7. 5ウイグル虐殺の真実」 イリハムマハムティ著 宝島社新書刊 2010年1月23日発行

副題：「ウルムチで起こったことは、日本でも起こる」

この本は出し遅れの証文のようなものである。なぜあえて、事件勃発半年後のこの時期に、世界ウイグル会議日本代表である著者がこの本を出版したのか、隅々まで読み尽くしても、その理由はわからない。もし彼がああ惨劇を社会に大きく訴えかけようとするのなら、この本を事件直後に出すべきであった。またわざわざ半年後の今日、彼が忘れ去られようとしているあの惨劇を、日本人民に再び思い起こさせようとするのなら、その後の半年間に起きた多くの論争を踏まえて、それを論駁し尽すような本を著すべきであった。

イリハム氏はこの本のタイトルに、「7. 5ウイグル虐殺の真実」と掲げているが、この本の中では真実が語られていない。たとえばイリハム氏は、P. 14で「虐げられているのは、ウイグルやチベットのような少数民族だけではありません。支配民族であるはずの漢族でさえ、年間10万件の暴動事件を起こしているといわれています」と、臆面も無く書いている。中国全土で勃発しているといわれている暴動については、私の暴動情報検証を検索すれば、それが実態とはかなりかけ離れた情報であることが、すぐにわかる。このような作業を行わず、出来合いの情報を基にして書いている著者に、真実を語る力があるとは思えない。

たしかに7. 5ウイグル事件は、現在でも不明なことが多い。しかし私の現地調査でも明らかにしてきたように、すでに多くの事実も判明している。イリハム氏は P. 16で、「中国では2003年から、数十万にも及ぶウイグル人の男女を強制連行し、全国各地で労働させているのです」と書いているが、それは真実ではない。私が現地調査した結果では、少なくともこの数年間、強制連行の事実はない。私はカシュガルの農村まで足を運んでその実態を調べたが、それは強制的ではなく自主的であった。ただし今回イリハム氏は P. 144で「2008年にカシュガルのヤルカンドのある村では、一人の19歳の女性が村の共産党政府から割り当てを受け、山東省の工場に“出稼ぎに”行くように命令されました」と書いている。私の調査した村はヤルカンドではなかったもので、近日中にそこに行き調べたいと思っている。ついでに山東省の出稼ぎ先にも調査に行きたいので、ぜひその会社名を私に教えて欲しい。昨年私は、出稼ぎ先の一つとされていた天津市の会社に行ってみたが、ウイグル人の姿はまったくなかった。おそらく山東省にもいないだろう。

イリハム氏は7月15日にウルムチで起きた事態についても、ウイグル人の起こした蛮行については、一行も言及し



ていない。イリハム氏は P. 28で「あの日、共産党政府は市内の二道橋などのウイグル人居住区を計画的に停電させ、武装警察などの部隊に無差別発砲をさせていました」と書いているが、私は信頼できる筋から、まったく別の情報を得ているし、実際に二道橋まで行って現地調査をして、それを確かめている。私はそこでウイグル人中年男性から直接、次のような話を聞いた。「私が二道橋の側の屋外食堂で、7月5日の夕方、友人のウイグル人と食事をしていたところ、突如としてウイグル人による漢族への暴行が始まり、目の前で数十人の漢族が殺された。友人のウイグル人は風貌が漢族に似ており、ウイグル語も話せなかったので、ウイグル人暴発青年からかなり詰問されたが、ハミ族だと言って許された。隣で食事をしていて背の低い漢族が一人、逃げ遅れていたのも、私たちは私たちと大きな車の間に隠れさせた。そのうちウイグル人暴発青年たちがその場を離れていったので、私は漢族に500mほど離れた民家に逃げ込むように言った。漢族はすぐにそこに全力で走って行った。ところがあと数10m というところで発見され、ウイグル人暴発青年が投げた石が頭部に当たって倒れた。そこにウイグル人暴発青年が集まり、その漢族を寄ってかかって殴りつけ、虐殺した。このようなことが方々で起こった。私たちは夜8時半から、その場に釘付けになっていたが、翌日の3時になって、やっと家路に着くことができた」。そのとき彼の目からは大粒の涙が流れていた。私はこれも真実の一面だと理解している。

イリハム氏はこの本の半分以上を使って、「私の“ビジネス”は何を扱っても面白いくらい儲かりました」と自慢話を展開している。私はイリハム氏のこの態度から、この人物の品性があまり高潔ではないと判断する。世界ウイグル会議のラビア・カーディル元議長にも言えることであるが、自らがビジネス界で儲けたことを誇りにしているようでは、真に独立運動を指導することなどできない。しよせんビジネスというものは、汚いものである。したがって自らがその世界に身を投じていたことを恥じ、しっかり反省することがない限り、崇高な民族独立運動を指導する資格はないと考える。

イリハム氏は P. 186で、「もしすでに(日本企業がウイグル自治区で)投資を済ませて現地で工場や企業を稼働させているのであれば、…、ぜひその従業員としてウイグル人を雇用していただきたいと思います」と書いている。しかし現実には、ウイグル族の若者は漢語を十分に使いこなすものが少なく、その上一芸に秀でた優秀な人も多くない。このような現状で、イリハム氏は企業にあえて損を覚悟でウイグル族の若者を雇えというのか。それは日本に進出している英米の企業に、英語が話せない青年を優先的に雇えと言っているのと同じである。イリハム氏はまず、ウイグル族の若者たちを「漢語や英語を勉強し、一芸をマスターし、漢族を凌駕せよ」と叱咤激励するべきである。私たち日本人も、「坂の上の雲」の時代、そして焦土と化した戦後、「欧米に追いつけ追い越せ」を合言葉に必死に努力して、今日を迎えているのである。

なお、イリハム氏はこの本の中で、カシュガル地区のヤルカンドで、昨年5月、漢族の小学校教師がウイグル人の生徒23人に対して性的暴行を加えていて、それが発覚し逮捕されたが、精神に異常をきたしているという理由で、実刑ではなく故郷へ送還されたと書いている。また、8月31日、ウルムチ市のサイバック区にあるウイグル人の小学校で、児童全員にインフルエンザのワクチンの注射が行われ、そのうち5人がその晩に高熱を出して死亡した。このことが注射針事件の伏線になったと主張している。この2件については未確認なので、近日中に検証したいと考えている。

### 3. 「不思議な経済大国 中国」 室井秀太郎著 日経プレミアシリーズ刊 2010年1月12日発行

この本は、中国をさりと概観している。したがって中国の現在の動向を掴むには適しているかもしれない。しかし深みのある分析は少ないので、すでにながしか中国と関わっている人たちには、物足りないかもしれない。

室井氏は、08年11月の4兆元の景気対策について、「決定も早かったが、実行されるのも早かった」(P. 36)と述べるだけで、それが「なぜ早かったのか」についてはまったく言及していない。このようなところが、私がこの本に深みがないという所以である。

株の上場についても、多くの情報を駆使して説明をし、その中で「政府は市民に理性的投資」(P. 78)を呼びかけていると書いているが、室井氏がもし証券会社の店頭には足を運び、中国の一般市民の株式に関する姿勢を生で掴んでいたのなら、もっとリアルな解説になっていただろう。市民たちは店頭で大勢たむろして、トランプゲームを楽しみながら株のボードを横目で見ています。つまり彼らは、始めからゲーム感覚で株の売買を楽しんでいるのである。このような市民たちに「理性的投資」を求めてもあまり効果はないと思う。

格差問題についても、「中国経済の新たな柱となった私営企業の経営者のなかから巨額の富を蓄積するものも出現し、都市住民の間での所得格差はかつて考えられないほどに大きくなっていった」(P. 121)、「底辺に取り残された人々が機会の不平等に対する不満を募らせていけば、社会の不安定化を招きかねない。世界の経済大国となった中国は、世界でも有数の格差による社会不安の危険性を抱えている国なのである」(P. 126)とありきたりの説明をしている。むしろその格差こそが、中国人民をチャイニーズ・ドリームの実現に駆り立てている原動力になっているのであり、それがさらに中国経済を飛躍させ続けているというのが現在の中国の実情なのである。

農村問題についても、安徽省の「中国農民調査」(陳桂棣・春桃著)を引用して説明しているが、この書は10年前の農民の状況を描いたもので、当時と現在とでは雲泥の差がある。昨今の中国では、農村の周辺に工場や商店などが林立し、農民は就職口困ってなどいない。むしろ都市に出た出稼ぎ農民工は、物価や住宅などの高騰によって生活が苦しく、農村で自宅から通っている人たちのほうが生活にゆとりがあるという逆転現象すら現れてきている。また農地を貸して収入を得るなどのチャンスも増え、今後は都市住民よりも農民の方が有利となるかもしれない。



室井氏は、中国が外貨準備高世界一になっても、「人民元が外貨準備の大きさにふさわしい国際通貨となるためのハードルは高い」(P. 157)と書いているが、その外貨準備の多さの根拠の分析も薄弱であるし、中国政府が狙っている金本位制についても言及していない。

「中国にも国有商業銀行のほかに株式制の銀行や地域に密着した銀行などが生まれて、少しずつ競争の“芽”が出つつある。富裕層の出現と拡大によって、新たなサービスの対象となる顧客も広がりつつある」(P. 174)と書いている。現在、中国では中小企業向けの小口金融を行う金融機関や、消費者金融を専門とする機関が生まれつつある。室井氏にはその面への言及もして欲しかった。

#### 4. 「中国ひとり勝ちと日本ひとり負けはなぜ起きたか」 宮崎正弘著 徳間書店刊 2010年1月31日発行

私はこの長いタイトルを店頭で見たとき、一瞬、宮崎氏が宗旨替えをしたかと思った。なぜなら宮崎氏のこれまでの著作には、「中国が崩壊する」とか「分裂する」といった題名のものが多く、まさか今回、「中国ひとり勝ち」などという文言が表紙に踊り出て来るとは思ってもみなかったからである。それでも本文を開いてみると、そこにはいつもの宮崎節があふれかえり、博学多識ぶりが遺憾なく発揮されていた。

この本の半分以上は、題名とは離れて、アフガニスタン情勢などの分析に費やされている。かなり詳細に記述されているが、私にはその真偽を判断する力はない。ただ宮崎氏の記述に初歩的なミスがあることから、全体の叙述が完全に正しいとは言い切れないと思う。

《ダッカ大学内の記念碑前で》→

たとえば、「バングラデシュにおけるマオイストはダッカ大学に公然と出現し、政治的影響力を無視できない」(P. 134)と書いているが、これは誤りである。私は今回、わざわざダッカ大学を訪ね、この件を調べてみた。事務局へ話を聞きに行ったところ、事務局員が「ダッカ大学には毛沢東思想を教えている授業もないし、そのような学生サークルもない。中国から留学生が数人来て、ベンガル語を勉強しているので、その担当教授を紹介する」と言われ、ベンガル語科の教授控え室に案内してくれた。そこでアブル・カシム・ファブル・ハク教授と、アハマド・コビール教授から詳しい話を聞くことができた。彼らは、「ダッカ大学には3万人の学生がいるが、マオイストはいない。授業でもマルクス・レーニン主義は教えているが、毛沢東思想は教えていない。現在、中国人留学生は1人である。10年ほど前は20人ほどいたが少なくなった。私の教え子たちが、卒業後、在バングラ中国大使館などに派遣されてくることが多いので、そのようなところから、噂が出たのではないかな。バングラデシュ国政にも、マオイストの影響力は小さく、議席はゼロである」と説明してくれた。私はこれだけ聞いて控え室を出たが、彼らがウソをついているとは思えなかった。さりとて宮崎氏ほどの人物が根も葉もないウソを言うとも思えない。宮崎氏はいったいどのような根拠で、「ダッカ大学にマオイストがいる」と言われるのか、ぜひ教えて欲しい。次にダッカに来るときには、それについて具体的に調べたいと思うからである。

《ダッカ大学の教授控え室にて》→

また「アフガニスタンは中国と回廊が繋がっている」(P. 123)という記述があるが、これも誤りである。たしかに地図上ではそのようになっているが、実際にはここは回廊ではなく高い山であり、タリバンが中国側へ潜入することは不可能である。私は昨秋、この地点の中国側を歩き確認してきたので、間違いはない。

さらに「天然ガスの宝庫＝トルクメニスタンからはるばるとウズベキスタン、カザフスタンを抜けること1833km。トルクメニスタンのガスを中国の新疆ウイグル自治区へ運ぶ遠大なパイプラインが09年12月に完成した」(P. 11)と書いているが、現実には使用開始にはまだ程遠いのではないかな。4月に他の調査のためウズベキスタンへ行く予定があるので、この点についても詳しく調査をしてみる。

宮崎氏はこの本の最後の部分で、中国に関する分析を行っている。そこでも博学多識ぶりが発揮されているが、その中には間違った叙述や古い認識もかなりある。たとえば、「2010年1月に“武広高速鉄道”が開通した。…(略)この武広高速鉄道の車両、実は日本製である。しかも日本側は引き渡すときに時速を275km以内は保証するとしたが、中国はその約束をすぐに反故にして、350kmで無茶苦茶な走行をしている」(P. 195)と書いているが、事実そうではない。私が調べたところによると、武広高速鉄道に使用されている車両は CRH-3型であり、その技術はドイツのシーメンス社のものである。車両設計時速は350kmであるが、実際の運行の平均時速は341kmと報道されている。武広鉄道の建設についても、最初の9276kmは中鉄八局とドイツの HPH 社が共同で行い、その後の1060km は中鉄八局が単独で行ったという。私は近日中にこの列車に乗って、真偽のほどをこの目で確かめてみるつもりである。

宮崎氏はこの本で、「中国がひとり勝ち」状態になったのは、アメリカ経済が疲弊したことが最大の原因であり、それをアフガニスタンを始めとする外交に対するオバマ大統領の優柔不断が弱さを増幅しているという。中国が漁夫の利を得ているというのである。また日本が「ひとり負け」状態に陥ったのは、鳩山民主体制の愚作のせいであるという。そして宮崎氏は、中国の「ひとり勝ち」の結果の軍事大国化に抗するため、日本も核武装しなければならないが、今か



ら開発しては間に合わないので、「日本は核弾頭をパキスタンから買うという選択肢を考慮しなければなるまい。あるいはインドから買うのもアイデアだろう」(P. 62)と主張している。これは極論に過ぎるのではないかな。

以上

\*\*\*\*\*

## 中国経済最新統計】(試行版)

上海センターは、協力会会員を始めとする読者の皆様方へのサービスを充実する一環として、激動する中国経済に関する最新の統計情報を毎週お届けすることにしたが、今後必要に応じて項目や表示方法などを見直す可能性がありますので、当面、試行版として提供し、引用を差し控えるようよろしくお願いいたします。 編集者より

	① 実 質 GDP 増加率 (%)	② 工 業 付 加 価 値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加 率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億ドル)	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加 率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005 年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006 年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007 年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008 年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009 年	8.7		15.5		31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2 月		(15.4)	19.1	8.7	(24.3)	82	6.3	35.6	▲38.0	38.3	17.4	15.7
3 月	10.6	17.8	21.5	8.3	27.3	131	30.3	24.9	▲28.1	39.6	16.2	14.8
4 月		15.7	22.0	8.5	25.4	164	21.8	26.8	▲16.7	52.7	16.9	14.7
5 月		16.0	21.6	7.7	25.4	198	28.2	40.7	▲11.0	38.0	18.0	14.9
6 月	10.4	16.0	23.0	7.1	29.5	207	17.2	31.4	▲27.2	14.6	17.3	14.1
7 月		14.7	23.3	6.3	29.2	252	26.7	33.7	▲22.2	38.5	16.3	14.6
8 月		12.8	23.2	4.9	28.1	289	21.0	23.0	▲39.5	39.7	15.9	14.3
9 月	9.9	11.4	23.2	4.6	29.0	294	21.4	21.2	▲40.3	26.0	15.2	14.5
10 月		8.2	22.0	4.0	24.4	353	19.0	15.4	▲26.1	▲0.8	15.0	14.6
11 月		5.4	20.8	2.4	23.8	402	▲2.2	▲18.0	▲38.3	▲36.5	14.7	13.2
12 月	9.0	5.7	19.0	1.2	22.3	390	▲2.8	▲21.3	▲25.8	▲5.7	17.8	15.9
2009 年												
1 月				1.0		391	▲17.5	▲43.1	▲48.7	▲32.7	18.7	18.6
2 月		(3.8)	(15.2)	▲1.6	(26.5)	48	▲25.7	▲24.1	▲13.0	▲15.8	20.5	24.2
3 月	6.1	8.3	14.7	▲1.2	30.3	186	▲17.1	▲25.1	▲30.4	▲9.5	25.5	29.8
4 月		7.3	14.8	▲1.5	30.5	131	▲22.6	▲23.0	▲33.6	▲20.0	25.9	27.1
5 月		8.9	15.2	▲1.4	(32.9)	134	▲22.4	▲25.2	▲32.0	▲17.8	25.7	28.0
6 月	7.9	10.7	15.0	▲1.7	35.3	83	▲21.4	▲13.2	▲3.8	▲6.8	28.5	31.9
7 月		10.8	15.2	▲1.8	(32.9)	106	▲23.0	▲14.9	▲21.4	▲35.7	28.4	38.6
8 月		12.3	15.4	▲1.2	(33.0)	157	▲23.4	▲17.0	▲2.05	7.0	28.5	31.6
9 月	8.9	13.9	15.5	▲0.8	(33.4)	129	▲15.2	▲3.5	10.6	18.9	29.3	31.7
10 月		16.1	16.2	▲0.5	(33.1)	240	▲13.8	▲6.4	▲6.2	5.7	29.5	31.7
11 月		19.2	15.8	0.6	(32.1)	191	▲1.2	26.7	10.0	32.0	29.6	34.8
12 月	10.7	18.5	17.5	1.9	(30.5)	184	17.7	55.9	9.7	-44.6	27.6	31.7
2010 年												
1 月				1.5		142	21.0	85.6	24.7	7.8	26.0	29.3

- 注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。  
2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1 月と 2 月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、( ) 内の数字は 1 月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。  
3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の 86%（2007 年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家統計局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。